



Title	敗戦前後の日記：一九四五年六月～八月
Author(s)	井本, 稔
Citation	大阪大学史紀要. 1981, 1, p. 111-116
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8312
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

敗戦前後の日記

一九四五年六月～八月

井 本 稔

六月五日（火）神戸市の大阪側の端の方にあった自宅、B 29 の焼夷弾で簡単に燃えた。翌日になつて、妻と次女と三人で、小さな風呂敷一つもつただけで京都にあつた父のもとに辿りつく。父が一言だけ、「焼けたか」と言つた。

六月七日（木）晴天、九時すぎ登校、すぐ警戒警報が出る。何だかあやしい予感がする。（そしてこの日に東野田という市内にあつた阪大工学部が空襲を受け、私の属する応用化学の建物は焼けた。コンクリート建てだったが、窓の側においてあつた木材から屋内に火がはいつた。私は学校にあつた、たつた一台のオイルエンジンのついた放水車の班長だったので、大いに活躍した。木造の建物で残つたものは一つもなかつた。焼け残つた本館のアーケード下に、学校の近くの人たちだつたろう、いくつかの屍体がならべてあつた——カッコ内は筆者注、以下同じ。）

六月一一日（月）学校へ行く。八浜先生見えた。（私は数え年で三八歳八浜義和教授の下の助教授であった。）守口の東洋紡の科学研究所へ行つて部屋を貸してもらえるかどうか聞いてきてくれ、との話で出かけた。（守口というのは学校の裏口に駅のあつた京阪電車で一〇分ぐらいの所に

あつた。）中島正所長に案内していただき、一部屋借りる」とにきめる。学校に帰つて先生に報告し、私のグリーブだけ守口に行くことに決定。とだつたので毎日学校へ行つたが、先生は一度も来られず。また空襲、B 29 が大阪市内の東部を中心に三〇〇機、学校へも二〇発ほど落ちたが、もう燃えるものなし放水車もオイル費い果して動かず。放つておいた。

七月二五日（火）京都で警報、九時に解除、それから家を出る。京阪電車、牧野でとまる。B 29 が美しい青空の中をどんどん飛んで行く。数えただけで一五〇機以上、敵機ながらまことに綺麗だ。草むらの中に寝ころんで見上げる。電車は出たりとまつたりする。歩くのもついほどになつて、午後二時になつて守口の研究所に辿りついた。誰もきていない。（あとになつて、この日二〇〇〇機が大阪に飛来したと聞いた。）

七月二六日（水）警報出たが、ともかく家を出る。高分子の講義をするつもりで十時半に学校につく。学生来ず。中止する。

七月三一日（月）朝から警戒警報が何度も出て一日中家を出られず。小型機が飛んでいる。日本の飛行機は「その日のための蓄積」ということで全く飛ばない。このじろ Hückel（の量子化学）と Eyring（の Rate Process）の一冊をゆっくり読んでいる。

八月一一日（土）六日の朝、広島に B 29 の一機が「原子爆弾」なるものを二～三個おとした。そのために広島はほとんど壊滅し、人の死傷は合計で二五万という。八日夜からソ連がついに戦争にはいった。どのようなことをモメンツにして戦争に介入してくるのか、と考えて

いたが、こんなに簡単に、一方的に戦争宣言できるとは予想しなかつた。弟夫婦、東京からつく。(あまり広くもない父の家に、父母、京大の理学部にいた四弟、それに妹、私たち夫婦と次女、南方に行っている、もう中尉になつていたかと考えるが、三弟の妻と長男、と大勢で雑居することになったわけである。)

日本人はいま勝つとか負けるとか考えているだけで、全体は生きていないのではないか、客観的にはもう日本人は滅びているのではないか、という気がしてきた。

八月一四日(火) 京阪電車の途中でまたB29の空襲にあう。電車から出て、小道に腰をおろして落下弾のするどい音を聞きつづけていて腰がぬける感じ。電車はもう動かないという。困りきついたら、折よく海軍の人のついた自動車をみつける。たのみこんで乗せてもらう。大阪にて、新京阪(今の阪急京都線)でまわりみちして帰宅した。

八月一五日(水) 京阪電車は動いているのかどうか不明。朝、町会長(当時は隣組があつて、その上に町会長なる人がいた)から正午に重大放送があるから、ラジオを聞くよとの達しあり。四弟も学校を休んでいたが、兄弟たち集つて、何だらうな、戦争終了かな、いや、いや陛下がみんな自分と一緒に死ぬようにと仰言るのだろう、そのどちらかにきまつて、などと話をする。

二弟の妻だけが堺に行つていて不在だったが、一二時まえに、父を先頭に家中で一応の服装をととのえてラジオのまえに立つた。陛下の放送のあることは一時半にラジオがのべていたのである。東を向いて頭を下げる。君が代の吹奏があつて陛下の御声が流れ出てきた。老

父が声を押しだすようにして泣いた。相当の長い間だつたが、何のことが全く分らなかつた。また君が代があつて、総理大臣の言葉がつづいた。そこではじめて戦争がすんだことを知つた。完全に敗けたことを知つた。この偉大な瞬間に家がゆらぐことがなく、時がやつぱり一秒一秒と進むのが、妙な気がした。

三弟の妻と私の妻が泣き出した。こういう空しさというものが、人間の世界にあつたのか。みんなで、これからどうなるのだろうな、と話しているうちに、再建という字の美しさ、喜びしさが感じられる瞬間もあつた。

貸家があるというので、兄弟三人で出る。人の顔をみて、みんな泣いたという顔をしているな、と四弟がいう。

家はだめだつたが、夕方帰ると父と母とが畠から南瓜かぼちゃをいっぱい持つて帰つている。大小五〇ばかりある。今日で軍需産業全部中止の命令があつたから盗まれるにきまつて、というわけで全部をもつてかえつた由。(入手が足りなくなつて、耕作ができなくなつた農家が畠の一部を貸してくれていたのであろう)考えてみると、朝の間に警戒警報がちょっと出ただけで、静かな夏の一日であつた。水で身体を洗つてねる。

八月一六日(木) 陸軍大臣阿南大将が自殺し、内閣総辞職したとラジオが放送した。無責任なんだな、と思う。何をする気もしない。Woods (の Advanced Calculus) の計算問題を一つやつてから守口の研究所に出る。生きられるかな、という思いがしきりにする。ドイツでは知識人がベルリンだけでも毎日一〇〇家族が自殺し果てていると新聞に出ていた。収入も食糧もなくなる日がくるかもしれない、と卒論学

生諸君と話。

八月一七日（金）今日も暑い晴れた朝。ともかく学校に出ると、学部長が私をよんでおられるときく。部長室に出向く。（部長は応用化学の上野誠一教授で、ずっと前に亡くなられたが、すぐれた油脂化学者であった。）先生は「すぐ、大学の拡張原案をつくれ」と例のどもる分りにくい調子で言つた。「先生、いま何を言うのです。新聞に大学が閉鎖されるかもしれません、と出でるじやありませんか」と私は言い出したが、先生はせつからちに抑えてどなつた。「ばかなことを言うな。大学の閉鎖なんてあるもんか。航空科や造船科は工合が悪いかもしだれん。だから先生をうつて、平和的な名前にかえてしまうのだ。これからは化学の時代だ。うちの大学もうんと伸びるようになる。大学が伸びて、はじめて日本も伸びる」と先生は物の怪につかれたみたいに、伸びる、伸びるところ返した。「そんな金、日本にないでしよう」、「金？ 大学の金くらい、どうなつとなる」と大へんな勢いで私は呆れたが、何だか勇気が出でてくる感じだつた。「その拡張案を文部省にお出しになるのですか、駄目にきまつてます」というと、「いや、マックアーサーに出す」と愚かきわまるオチになつたが、私は上野先生を心から尊敬した。私も、実際はどうなるかは分らないが、大学の閉鎖のその瞬間まで、あくまで大学にくつついてやろう、それまで勉強をつづけてやろう、と決心しようと思つた。これから理工科系の学徒が日本の開発を背負うのだ、と私は大へん昂揚した氣持で部長室を出た。（今になって考えても、上野先生の単純さは見事で素晴らしい、と感歎する。）午後になつて守口の研究室にひき返すと、学生の大平君、根来君が

まちかまえていたように「大学は閉鎖になるのでしょうか？」と言い出した。みんなが心配しているのである。朝のことがあつたものだから私は元氣であった。「君たちがぐらついてどうなる。来月の末には卒業するのじやないか。じつとこらえて勉強しとおすことが今いちばん大切なじやないか。学徒として少しでも高いところに到達すること以外に、僕たちが日本につくす道はないと思うよ」と言つたが、両君はうんと言わなかつた。ともかく故郷も心配だからいつへん帰つてみる、というのが結論になつた。（この年は九月に卒業期がくりあがつて、いた。夏休みなどといふものはもちろんなかつた。）

八月一八日（土）守口での昼食は久しぶりでたくさん来て（矢勤していた女の人たちも）、分れの会みたいな妙な気持だつた。学校に戻つてから自転車を借りて生活科学研究所（現在の大阪市立衛生研究所）に行く。始終会（同じ年齢ごろの化学者ばかりが集るおしゃべりの会で、いまでも続いている。当時みんな四〇歳前後だった）があり、八谷、大島、庄司さん、幹事の末次さんら九人集つた。話はこれからどうなるか、でもちきつた。敵の上陸軍は十万くらいだらうというが、大したことないな、とか、川西航空機では残つたアルミニウムでバケツや鍋をもう製造はじめた、ベークライト工場では毒ガスマスクを中止して、食器のブレスに昨日から切り替えたよ、とか。大阪商人は転換が早くて全くたのもしい、とみんな希望をもつていた。

五時までに自転車を返す約束なので、途中で出て、半ば焼け野が原のような街を学校へ帰る。冶金教室の前でA先生が、どこかのおじいさんを頼まれたのか、一緒に荷車に古い木やドラム罐をのせておられ

た。自宅に運ばれるのである。頭を下げるとき先生は、私を鼻白んだ
ように見て、「俺はな、百姓をやるんだ、畠もすこし手にはいりそり
だ」と話しかけられた。(A先生は私どもの応用化学の五人の教授の一人で、
戦争中は「国事奔走教授」として華やかな方であった)「それはよろしいで
すね」と答えるながら、心中で反撥した。今日、東久邇宮内閣成立。

八月一九日(日)快晴、上野先生命令の大学拡張案をつくる。造船
科を材料工学科、航空科を交通工学科に名称変更し、応用化学科に五
講座増設(天然物の厚生利用、染料、高分子材料、香料、分析化学)する。
みき(妻)に清書させた。

昨日、二弟が一日がかりで神戸の六甲国民学校まで長女のことを聞
きに行つてくれた。(長女は今で言えば小学五年生で、集団疎開で姫路から
山奥の方に行つていた)ちょうど県の校長会議がある当日だつたようで、
結論がまだ出でていない、という返事だったそうだが、今朝の朝日新聞
では、戦災地区の児童はもうしばらく現状のままにする、ということと
になった由、裏側に(新聞は一枚二ページしかなかつたらしく)パーシー牧
師という人が「上陸軍は陽気なアメリカ人だから心配は無用だ。上陸
して一週間もしたらベースボールの試合を申しこむかもしれぬ、そ
ういう国民気質なのだ」と書いている。良い記事だと思った。「もし負
けたら、敵の殘虐は目にあまるものがあろう」と言いつづけてきた新
聞やラジオや町内会長のことをふと思つた。もつとも何が何だか分ら
ない、という気がする。夜、二弟、四弟と三人でEyringの本を読む。

八月二〇日(月)二年生の講義で学校に行く。八人いる。勉強は
りがなくなつた、と学生が言う。そんな愚かなことはない、これから
僕たちの時代だよ、とあじる。「今朝の新聞では、陛下のお言葉で燈
火管制が中止になるそうですね」と学生が言つてゐる。ほんとうなら
嬉しいな、と思う。講義をすませて、部長室に行つて、昨日つくりあ
げた大学の拡張案を上野先生に提出。(この後で、この書きものは当然のこ
とだつたが、どこかに消えた。上野先生は忘れてしまわれたにちがいない)。
その後で、この書きものは当然のこ
とだつたが、どこかに消えた。上野先生は忘れてしまわれたにちがいない)。
いやつて、大学閉鎖は必ず来るのだから何をするかを考えよう。
みんなバラバラに分れたら勉強も何もできやせん。だからともかくど
こかに部屋を借りよう。研究費が残つてゐるからそいつを使えばよい。
毎日みんなそこへ集つて本を読んだり書いたりしようよ。困つたもの
から先に就職をせわすることにしよう。当分の間の面倒をみるくらい
の金は教室にあるはずだ。などと悲しいのか愉快なのか分らないよう
な雰囲気であった。化学だけど私も入れて下さいよ、とたのんで帰る。
正午から十五日に出た大詔奉読式が本館の大講義室であった。上野
先生が口の中でごもごもと読んですぐ終る。あと応用化学の教官会食
に出る。B先生が「俺は日本人にあいそをつかしたよ。戦争中に、あ
つ、これは良い話だ、ということを探してばかりいたのだが、特攻隊
をのぞいて、何一つなかつた。学者も兵隊も会社の人も自分のことば
かり考えていたじやないか。俺だつて生活していたんだから、みんな
のそういう連中の中におれば、生きられないんだから、俺も利己的だ
つたさ」と大きい声で言われる。教授つていう人たちは何を考えてい
るのかな、と昨日のA先生のことも思い出して、不愉快になる。「で
すけど、学者というのは今までより、これからはもつと大切になるか

もしませんよ」と思い切って言うと、「もう駄目だよ、大学の閉鎖はきまってるんだ」と頭から否定された。

仕事のことでC先生を訪ねる。今日の会食の席上で、部長がみんなを集めて、ただ読んだのはけしからん、学生に対する訓示ぐらいは総長が学部長の名で出すべきだ、ときかんに憤慨しておられたのである。「先生、応用化学教室の名前で、いまこそ落ちついて学問をやろう、という学生に告げる檄文を貼りだしませんか」と言うと、「檄か……」と先生は話をはぐらかせた。「この大学には自分のことしか考えない教授が多すぎるからな」と返事されただけだった。何のことが分らない。大げさに言えば六月の戦災以来、応用化学は主に助教授以下で保たれている。D先生などは主任教授なのにほとんど学校に顔を出されない。今日も来ておられない。威勢のよかつたC先生に「人は、憎まれてもいいと思うのですが、思い切って大学の改革をなさいませんか、とくに人事のことですけど……」と言つてみる。「それはいいかもしないが、効果ということも考えてみんとなあ、人を怒らせるだけではつまらんからなあ」ととたんに神妙な顔付をされた。(戦争がすんで、教授の人たちは大へん氣落ちしておられたが、それだけ助教授以下の者たちが氣負っていたのである、私自身も大へん生意気になっていたにちがいない、と思う。)八浜先生は今日は見えなかつた。

夜学を五時二〇分から六時四〇分まで。(学校に何かそういう戦時中の施設があつたのである。)先週まで火薬の講義をしていたのだが止めて、今日から合成樹脂にした。京阪電車に電灯がついていて本が読めた。珍しかつた。

八月二一日(火)雨がちつとも降らない。戦争がすんでから電車がかえつて混むようになった。満員電車で守口に行く。研究生の宮崎君だけ一人いて学生は一人もない。今までのテーマを中止しようと決心。考えたのだが、卒業しても学校に残る予定の垣内弘君とベークライトの基礎研究をしようと思う。それで基本試剤をすこし大量に作つておこうと思って、石炭酸とホルマリンの精製をやる。午後おそらく学校に行くと八浜先生がおられて何日かぶりでお目にかかつた。先生によると四五万人くらい上陸するらしい。沖縄と九州が中華民国、満州、朝鮮、北海道がソ連、本州が米英の受けもちになるようきまつたといふ。「ともかくそなつたら盛り場には近づかんことだよ」と言われる。何だか、大へんくだらないことを聞いたような気がして意氣上らず。

八月二二日(水)朝、守口の研究室に出て昨日のつづきの実験、今朝の新聞では二五日から敵の飛行機がとびはじめ、二六日から米軍進駐の由。いよいよだな、と思う。午後学校に行くと菅田教授が私をさがしている、というので菅田さんの部屋に行く。明日の夜に広島に一緒につくとうという話。広島は予想外に被害が大きく、この目で見ておくのがわれわれの義務だよ、と彼が言つた。(菅田さんは私と同じ年の阪大の卒業生だが、電気通信の方の教授になつていた)大いに考えたが、化学の僕が行つても、ただの野次馬にすぎんない、野次馬になるよりEyringの本でも読んだ方がましだ、と思った。僕は行かないと断ると、菅田さんは情けなさそうな顔付をした。夕方おそくなつて京橋の駅に出てが、どの電車も超満員でのれない。一時間近くまつても駄目、逆

に天満橋（そこが大阪の起点であった）まで出て、やっと乗つてかえった。

八月二三日（木）雲が出てきて涼しい。新聞に天氣予報がのつてゐるのに気がついた。何年ぶりのことか。満員電車の中で、吉川英治が「吾々は思い上つていた」という副題で何かを書いているのを人の新聞から覗きみて、とたんに立腹をおさえかねた。日本をここへ曳つぱつてきた責任はああいう愚劣な精神主義的文学者にも大いにあるのだ、日本の精神がいかに偉大であるかを書き、それはそれでいい、しかしそれが世界に冠たるものとわめく必要がどこにあつたか、しかも日本の発展は科学の克服にある、精神が科学に負ける道理はない、などと叫びつづけたのは、吉川英治らを頭にする「日本文学者」だつたじやないか。あやまるのなら分るが、われわれは思い上つていた、とは何事かと、内容は分らないが、実に腹立たしかつた。

学校で教官会食。そのあと若い人たちと Hückel の二重結合理論のところを読んだ。

八月二四日（金）大へん身体がだるい。プラットホームでもどくでも、しゃがんではばかりいる。長女を迎えて行きたし。

八月二六日（日）台風、東京地方。米軍上陸二日間延期。三一日の停戦協定が米艦上である予定も九月一日に延期の由。

八月二七日（月）講義をすませると B 先生が助教授連を集めて、D 先生が学校にちつとも出ないので主任教授をやめてもらつことにしたから、と言つた。それは良いことだと思つたが、教官会食には珍しく先生方が全部そろつて何もなかつたような顔付をしておられる。今朝の新聞に京大の児玉教授が今までの学界を評して指導者一般のつまら

なきをかこつておられたことが話題になつたが、先生方は「あんなこと分りきつてはいる」と短くやつつけた。自分たちのこととも考えられるといいなあとと思う。すんでから八浜先生に、D 先生のこと、どうなつたのですか、と聞くと、「ああ、あれはいままで事情があつて休んでいたが、これからはちゃんと主任の仕事をする」ということで済んだよ」と事もなげであった。へえ、と拍子ぬけした。グラマン機が大阪の上空をぐるぐるとまわつた。みんな無心の顔付で外へ出て見ていた。

八月二八日（火）新聞によると日本の港湾や飛行場の設備が貧弱すぎて、米軍の五〇万人の上陸に五カ月もかかる、という。何だか分らない。日本の軍事力ってそんなものだつたのかしらん。学校へ行つて、もう守口の研究所をひきあげる算段をしたいと相談しようと考えたが、八浜先生見えず。

八月三一日（金）正子（長女）を迎えて行つた。先日、蚊や蚤にくわれて正子がひどく弱つていることを聞いて決心したのである。朝早く出たのに姫路につくと昼すぎになつた。車中で弁当を人にもまれながら立つてくつた。姫新線のプラットホームで一時間半もまつていると、やつと汽車が出るという。しかし客車ではなく無蓋の貨物車である。それにいづぱい乗る。そして山間を走つた。夕立があつて炭塵と雨とで頭からまづくろに濡れた。五時ごろ落合につく。集団疎開のお寺はそう遠くなかった。入口をまわつた所で子供たちのさわぐ声がした。正子はやせこけていた。恥かしそうに出てくる姿をみたとたんに涙がほろほろと出るのが分つた。戦争がはじまつてから初めて私は涙を出した。